

令和 5 年 6 月 3 日現在

機関番号：11201

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K13095

研究課題名（和文）アンテベラム期の活字媒体における「家庭性」の表象に関する研究

研究課題名（英文）A Study on Representations of "Domesticity" in Printed Media

研究代表者

高橋 愛 (Takahashi, Ai)

岩手大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：90530519

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、19世紀中葉のアメリカの家事指南本をはじめとする活字媒体において「家庭性(domesticity)」の概念がどのように表象されているのかについて検討を行った。具体的にはリディア・マリア・チャイルドの『アメリカのつましい主婦』とキャサリン・ビーチャーの『家政学論』、さらに、ハーマン・メルヴィルの「私と私の煙突」および「林檎材のテーブル」で提示される主婦像の分析を行い、女性による家事指南本も、男性による小説も、家庭を女の領域とする同時代のジェンダー観に従った主婦像を提示しているようでありながら、そこからの逸脱も浮かがるということを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、リディア・マリア・チャイルド、キャサリン・ビーチャー、さらに、ハーマン・メルヴィルの家事や家庭についての著作の分析を通して、家事指南本でも小説でも美德としての「家庭性」よりも実態としての家庭が描かれていること、また、家事指南本での主張はジェンダーに基づく領域分離を唱道すると同時に領域侵犯をするものでもあることを明らかにした。「家庭性」概念の研究では女性作家による指南本や小説に焦点が当てられる傾向があるが、本研究では男性作家の視点も導入して男女双方の立場から検証を行った。この点が本研究の学術的・社会的意義であると言える。

研究成果の概要（英文）：This research explores how the concept of "domesticity" was represented in mid-19th century American print media such as housekeeping instruction books. By analyzing works such as Lydia Maria Child's "The American Frugal Housewife," Catherine Beecher's "A Treatise on Domestic Economy," and Herman Melville's "I and My Chimney" and "The Apple-Tree Table," it is suggested that both housekeeping books by the female authors and short stories by the male author make some digressions from the acknowledged gender norms, which assigned the home as the female sphere, while they seemingly depicted housewives in accordance with those norms.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：アメリカ文学 19世紀 ジェンダー 家庭性

1. 研究開始当初の背景

これまでにジェンダー研究の分野により、19世紀アメリカの白人ミドルクラス社会では、公的領域での生産活動を男のもの、私的領域での再生産活動を女のものとして振り分けるドメスティック・イデオロギーが浸透していたことが明らかにされてきた。しかし、アメリカにおける「男らしさ」の理念の変遷に目を向けると、分離領域の考え方は植民地時代にすでにあったと言える。それは、植民地時代には所帯を持って妻子を養うことが成熟した男の証ととらえられてきたこと、言い換えれば、「男らしさ」が家庭を守る妻の存在を前提としてきたためである。

研究代表者の高橋は、本研究課題の着想する以前から、アンテベラム期の北部白人ミドルクラスの間で是認されていたジェンダー規範からの逸脱に注目しながら、ハーマン・メルヴィルの小説における「男らしさ」の表象について研究を行ってきた。「男らしさ」の概念を軸にメルヴィル文学を研究するなかで、「男らしさ」について論じるにはそれを支える「女らしさ」も検討することが不可欠であること、さらに、「男らしさ」の概念を下支えする「女らしさ」では「家庭性」が特に大きな要素になっていることに思い至った。

ドメスティック・イデオロギーに代表される19世紀のジェンダー規範に対する作家の抵抗に関しては既に研究が進められており、国内の先行研究としては相本資子『ドメスティック・イデオロギーへの挑戦 ― 19世紀米国女性作家を再読する』(2015)などがあつた。ただし、「家庭性」など「女らしさ」の文学的な表象や抵抗についての議論は女性作家による指南本や小説の分析を通して行われる傾向があり、「家庭性」の概念およびこの概念の体現者である主婦に対する男性作家の眼差しにはさほど注意が払われていなかった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、(1)アメリカのミドルクラス社会に浸透していた「本物の女らしさ(True Womanhood)」の概念の支柱のひとつとされた「家庭性(domesticity)」が家事指南本ではどのように定義されているか、(2)家庭性を証明するものとして家事指南本ではどのような家事・家計管理の能力の習得が推奨されていたのか、(3)家事指南本などでの定義やアドバイスが文学作品ではどのようなかたちで描かれているかを明らかにすることである。

3. 研究の方法

本研究では以下に示すように対象を定め、文献資料の分析研究を行った。

(1) ハーマン・メルヴィルの作品を例とした男性作家による主婦表象の分析

ハーマン・メルヴィルの「私と私の煙突」(“I and My Chimney,” 1855)と「林檎材のテーブル」(“The Apple-Tree Table,” 1856)という家庭を舞台にした2つの短編小説での主婦の表象を分析することで、アンテベラム期の男性作家が同時代のジェンダー規範についてどのように取込・逸脱をしているかについて検討を行った。

(2) リディア・マリア・チャイルドの著作に見られる「家庭性」理念の分析

19世紀前半に家事指南本として絶大な人気を誇ったリディア・マリア・チャイルドの『つましい主婦』(*The Frugal Housewife*, 1828)を取り上げ、本書における主張や具体的アドバイスの分析を通して、家庭性がどのように定義されているかについて分析を行った。

(3) キャサリン・ビーチャーの著作に見られる「家庭性」理念の分析

家事を科目化させ19世紀における家政の権威と目されるキャサリン・ビーチャーの『家政学論』(*A Treatise on Domestic Economy*, 1842)を取り上げて「家庭性」理念を分析するとともに、「家庭性」の唱道者によるジェンダー規範からの逸脱について検討を行った。

4. 研究成果

研究の方法で示したように対象を定めて文献調査を行い、以下のような成果を得た。

(1) ハーマン・メルヴィルの作品を例とした男性作家による主婦表象の分析

ハーマン・メルヴィルは「私と私の煙突」と「林檎材のテーブル」の2つの短編でミドルクラスの家庭を描いているが、いずれの作品においても、語り手の妻は発言力でもって夫を圧倒する

存在として描かれている。このような主婦の表象は、「本物の女らしさ」に象徴される理想的女性像から逸脱するところが多分にあるように見える。しかし、家、特に居間における主婦の役割に関する同時代の言説などを踏まえると、メルヴィルが提示した主婦像は、家庭の切り盛りをする現実の主婦の姿を反映したものとなっていると言える。

メルヴィル作品についての研究成果は、日本アメリカ文学東北支部および日本アメリカ文学会全国大会での口頭発表、および、『欧米言語文化論集』（岩手大学）掲載の論文で公開した。

(2) リディア・マリア・チャイルドの著作に見られる「家庭性」理念の分析

リディア・マリア・チャイルドは『つましい主婦』において、炊事洗濯の具体的アドバイスや教訓的事例を提示しながら、質素儉約や勤勉さを通して女は自らの有用性を示すべきであるという主張を行っていることが確認された。このようなチャイルドの姿勢は前時代的な美徳の主張のようにも見えるが、19世紀アメリカの経済情勢を鑑みると、彼女の主張は、景気の影響や自らの消費行動で家計の切り盛りに四苦八苦する主婦の実態を反転してみせるものでもあると言える。

チャイルドについての研究成果は、日本アメリカ文学東北支部で口頭発表を行うとともに、『東北アメリカ文学研究』第45巻（日本アメリカ文学東北支部）掲載の論文で発表した。

(3) キャサリン・ピーチャーの著作に見られる「家庭性」理念の分析

キャサリン・ピーチャーは『家政学論』において、女は家庭に留まることで家庭内での影響力はもちろん公的領域での影響力も持てるようになるとの主張をしている。ミドルクラスの女を家庭に留まらせるためにピーチャーが取った戦略は、主婦業、すなわち、家政の専門科目化・専門職化である。『家政学論』の分析を通して、ピーチャーが「家庭性」を唱道するために取った戦略は家政という私的営為に公的地位を与えようとするもので、このような戦略は、分離領域に則るジェンダー観に沿っているようでありながら、実際には領域侵犯を犯すものだと考えられる。

ピーチャーについての研究成果は、日本アメリカ文学会東北支部での口頭発表により公開をした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 高橋愛	4. 巻 45
2. 論文標題 『つましい主婦』から見る家庭性	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東北アメリカ文学研究	6. 最初と最後の頁 3-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋愛	4. 巻
2. 論文標題 メルヴィルの描く鬼嫁 「林檎材のテーブル」の家庭表象	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 欧米言語論集	6. 最初と最後の頁 219-231
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 高橋愛
2. 発表標題 キャサリン・ピーチャー『家政学論』に見る女性性
3. 学会等名 日本アメリカ文学会東北支部2021年度3月例会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 高橋愛
2. 発表標題 リディア・マリア・チャイルド『(アメリカの)つましい主婦』における家庭性
3. 学会等名 日本アメリカ文学会東北支部例会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 高橋愛
2. 発表標題 メルヴィルの描く「鬼嫁」
3. 学会等名 日本アメリカ文学会東北支部例会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高橋愛
2. 発表標題 Melvilleの「家庭」小説 "I and My Chimney"と"The Apple-Tree Table"における主婦像
3. 学会等名 日本アメリカ文学会第58回全国大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関